

落選展とは前衛芸術家たちの保守的な画壇への反抗であった。しかし、自分は反抗のためではなく作品をあえてもう一度改善したものを出しなおすことで、ささやかにこの作品たちの供養をせしむるものである。俳壇をぶちぬくという覚悟の布石として。第六十八回角川俳句賞予選通過。二次選考落選。【F1】

百三十七億年に風車

「いちめんのなのはな」色の菜の花よ

蝶止まる八分休符の力ほど

坂にふと朔太郎忌のポストかな

バンパイアのように起き上がれる昼寝

飛び込んで薄暮の脚のバスケット

カラーバーに似ているだけの虹粗雑

夕焼に殉教の丘見えてくる

エジプトの壁画の姿勢打ち水は

打ち水に北斎の波ありけるか

かき氷器を武骨なる昭和の手

炎天を光る納骨後の一基

ゆるやかにトマトもぐ音大きけれ

息を食う瞬間があり心太

三歳のはだしアベベのつちふまず

秋雨の軸にプラネタリウムかな

野分来し職員室のカープ帽

ひぐらしは疑問形なのです問いなのです

マッチ擦る香りより盆始まりぬ

【F1】にて秋霖

六道の接する櫓田の広さ

秋蝶の墜落リリエントールの死

秋分や「しろ」のクレヨン使い出す

アレグロに秋夕焼ぐるんと変わる

炊くまでの音尊けれ栗御飯

ボウラーのように南瓜を持って売る

秋夕焼ニコライ堂の十字架を

つらそうですねあなたもしぐれてみませんか

冬晴の十把一絡げの光

どす紅い「火の用心」のチラシかな

冬銀河アイヌの織れるものはみな

スクラムの影まるごとの歩みけり

風を禅問答のように聞け

サルバートル・ムンデイの口冬茜

高台の先っぽの墓子守柿

水仙の白べったりと白きこと

ケーキ屋の香りのままのコート脱ぐ

犬釘はちよつとだけ犬空つ風

凧に土偶のへその深さかな

早く着く方へは乗らず初電車

旧年の数式残すノートかな

春風やトムヤムクンを強き赤

春暑く棚からかつぐ哲学書

白愛す春の大きな雲愛す

山笑う微塵も隙を見せぬまま

ぶらんこを悲しき歌を嫌いつつ

春の雪古来人間には魔法

パンが来たように桜がぎやつと散る

桜より始まる商店街長く

春昼のクレイアニメのような猫